

野 坂 本 物 語

凡 例

一、原本は薩島神社宮司野坂元定氏所藏の古写本一冊で、野坂家の祖先に當る榎守房頭が、天正三年八十一歳の老境にあつて書写したものである。

一、原本の忠実な翻字を心掛けたが、仮名はすべて通行の活字体に統一し、また私に句点を施した。本文批判の上からいえば、どちらの措置も批判の障害になる場合が多々あらうと思ふが、判読を願いたい。

一、誤字・脱字と思われるところには、(マ、)と傍注した。一字の場合も、数字にわたる場合もあるが、その点は本文を讀んでいただければ分ると思ふ。この外にも誤字・脱字はあると思ふが、断定できないところは省略した。

一、虫損のはなはだしい所は□で示し、判読した文字を右傍に注しておいた。

一、(6才)の「になこく」^(?)、(15ウ)の「()」^(?)父君」、(33ウ)の「たゝに人々」^(?)、(37才)の「花木桃」^(?)の四

か所は難読のところ、原本の写真を掲げておくべきところであるが、ここには省略させていた。なお(28才)の歌の中の「月の闇」の闇の字には草冠があるが、通行文字にした。同じ頁の歌に、「今世」^来と傍注のあるのは、

原本のままである。

(金子金治郎)

「野坂本物語」

まことや、春宮の御事さたまりぬれば、大納言、わか思ひは、つるにむなしくとおほえ給へは、心もたゆ／＼しきまておほしほれたり、せめてなくさむやとて、たひにおはしたりければ、此かたは、いとのとやかにて、いつもむすほれつゝなかもふし給へるに、さしのそき給ふを打見合つゝ、御かほさとりち向て、木下にまきれ入給ひぬるに、あかす口をしきて、将君にとかくかたたる給ひて、

思ふこといはてむなしく年をへは谷むもれ木くちはてねとやと、うちなかめ給へる御在さまそ、けにたくひなくうつくしく見え給ふ、御身をよしなき事ゆへ、むろのいしまのけふりならてはとのみおほしこかるゝ、いと心」(1オ) くるしきや、とろくろより

は、心もとなくおほしそけは、まいり給ふへき日なと定給へるに、大とのには、いつの暮といそき給ふにつけても、姫君は、うきはためしもおほしなげくに、まして雲居はるかなるすまひなとはふさはしからず、みな人はうき物とおもひしり給ひて、又うき事あらは、大とのゝおほさむ事も、猶まさりてはちかましかるへし、たゝかゝるさまをかへて、見えぬ山ちとのみおもひしに、いかなるむくるにて、露の命のきえやらて、又うき思ひせむとすらむと、昔の世さへ口惜おほししらるゝ、中納言も、さたかに聞あらはしてのちは、いかなりける事そと、せんかたなくおほしうかゝれとかひなし、心ならずのみなひきし事も、』(1ウ) 少将にあはてとのみおほして、うかゝひたゝすみつゝ、おのつからのひきまもやと歎給へ

と、さるへき便もなし、ましておよひなき御すまひに成給ひなは、つるにうき物におほしとられたてまつらむ事も心うし、我なから、いかゝしつるそやとより外かは、ことさらおほえ給はず、せめて見もせぬ見えぬところならば、忘草も生ぬへきに、何に忍ぶの明暮は、かはらぬ在横にて出いりしさまを、心ほそく見出したまひけむと、いかばかりうき物にふかくおほしいりけん、少将かいかと思ひけんとおほしつゝ来るに、御心の内はやるかたなく、御袖はひるまなくなかもふし給へ共、いかにととふらふ人たになきに、たゝ空のみそ我心は」(2オ) しりぬらむと、雲のは立の物おもはしさはやるかたなし、ひるはひもす、よるは露まどろみたまはず、□めて在しなからのありさまを、夢にたに見るわさもかなと、おほしこかれてまどろみ給へる夢に、姫君たゝありしすかたにて、いみじく物おもへるさまにて、うちそはみて、

たねまきし行ゑもしらぬなてしこの花のあたりをたつねてもみよ

打なかめ給ふと思ひて、此ほとおもひつる事を、さて何にとうち出んとし給へるほとに、打おとろきぬ、さは夢しりせはといとかなし、撫子と在しは、さる事の在けるにや、ありしてならひもおほつかなき事に、さたかなる夢のしるへも思ひ出られて、いとゝやる」(2ウ) かななし、さやう成けむ時は、さいしやうなにともてわつらひけん、世にあらは、何方に如何にして置たる覽と、おほしつゝくるにも、我か心のみそつらく置所なきまておほえ給ふ、此月のころ、露しらすして過しけむかなしき、夢のおもかけも身にそふ心ちして、せめてなき人と聞なしたらは、そのおもひはかりにてやゝむへきに、これに目に見る／＼所になし、さてやむへきむちもしたまはず、とのに

は御まいりすてに夕さり成れば、女房などもひまなくそよめきたり、大納言は、つゝの事とおもひながら、むげに上所にみなし奉るは、いまはとたのみたになくな敷敷て、むねもふすかりて、うこくへしとおもひたま」(3オ)はね、さりとては、おとよはうへのおほしまとはんもい□^たわしければ、ねんしてありき給ふ、せめての事に、けしきたにゆかしくて、たいにおほしましたれば、大かたのよは物さはかしく見ゆれと、此かたはいつものとかにて、ひめ君は盡せぬ詠かちにて、外をつくく見渡して、御かほなんとみたにあらはれにけりと見ゆるに、何事をかばかりおほしいるらむ、は君の事にてそあるらむとまほり給ふ、御前にことに人もなくて、そこはかとなくなかめいたまゑる御ありさまは、けにたくひあらしと、うつくしくなひきかゝりたる髪のかゝり、まみひたゐなの、たゝゑにたらむこゝちして、こゝそと見ゆる所なく、心ふかけに』(3ウ)しつめ給へる御さまを、これ明尋我か物にて、云ひたはふれ、打多ませ奉りて見るよあらむに、いかばかりうれしからむとおほえて、行ききの事もたとられす、我心ながら、是をよ所に見なし奉りなは、いかに成へきか、けにあふにしかへはと、かゝる事にや、おしからぬ身を、つくくまふり給へは、今そ見おこせ給ひて、あさましくて御かほもあかく成に、まきはし給へるようゐなとは、又たくひあらしと見ゆ、つゝ給ひて、御前なる山ぶきをとりてまいらせ給ふとて、

口なしにふかく染ぬる戀ころもおもへといはて過る身としれと云ひもあえず、⁽⁴⁾なみたのほろく⁽⁴⁾とこほれ給ふにあやしき、⁽⁴⁾「(4オ)御袖をまへとらへて、袖のしからみせきかねたり、女君いと

おそろしくおほえ給ひて、御なみたもあせも、一つになかれそひたり、やかてひれふし給ふ、おとこ君月ころ思ひあつめたる事を、かくとたにしらせ奉らて、かた思ひにやみんは、むげに云ふにかひなしとおほして、そのかたはしをたにとおほえ給ふに、中く心まよひのみかきくらしして、えやり給はず、泪むせ返りなからも、見そめ奉りしより人しれすおもふ心、夢にも御覽しけむ物を、かゝりけりと露しらせ奉らて、さてむなく谷のむれ木とくちはてなんも、後の世までもつみふかく侍るへきを、あはれとたにおほししらは、うき世のおもひ出にて侍りなむ、』(4ウ)よ所なから見奉るにこそ、あらはあふせの末も頼まれしを、今は何にいのちのちなからへてかなと、つふく⁽⁴⁾と云ひつゝけ給へとも、たゝあるかなきかにおほしまといて、御みゝにもいらす、いとちかきけはひの御にほひは、けにかうなからしぬるわさもかなと、立のくへきこゝちもせず、たゝあはれとたにおほしめさは、身はいたつらに成ぬとも、⁽⁴⁾さらにおかしからしとのみせきかねたり、人のけはひもすれば、今はかひなき物ゆへとおもひねんして、たち退給ふにも、つゝましけ⁽⁴⁾成け成りつる面影は、いと身そふこゝちして、おの□篠はらとこ⁽⁴⁾ろにもあらずいはれ給ふ、ひめ君は、いかなりつる事とおそろしく、物におそはれ』(5オ)ぬる心ちし□^給ひて、とにかくにうき事おゝき在さまを、おぼしつゝくるに、おやたちおはしまさは、おもひかけぬすまひせしやと、いつもはれくしからぬに、いととおほしみたれて、御心ちもくるしきまてになれば、御ちやうにまきれ入給ひぬ、暮行は、北の方立そひ給ひて、いかにく⁽⁴⁾とすゝめ給へとも、さらにうこくへき心ちもしたまはねは、御めのともし立そひて、

つくるひ奉れば、我にもあらすなからまいり給へる、大納言、御せ
らととのやうにたちそひ、御かいしやくし給へとも、ひるの御うつ
りかも身をさらぬ心ちして、いとよほけしとしきに、思ひねんし
てありき給へとも、我にもあらぬこゝ地し』(5ウ)たまふ、宮の
中納言も、かゝるありさまを見給ふにも、麴うつともおほえず、
いかにしつる事そのみ口をしく、なからへても何にかせむとて、
思ひあくかれて、北のかたを見給ふにも、うらめしきこゝちして、
おほろけにてはおほせず、春宮には、いつしかと心もとなくおほし
めし、御つほねはきりつほなり、とのこゝろをつくし給ふ事なれ
は、なにしかはおろかならむ、女ほうわらはまでも、さるへきか
きりをつくして、しはたし給へり、まうのほらせてこらんするに、
姫君いとうつくしきさまして、むらさきにほひ、やまふきうはき、
むめのこうちき、よなるきなるかたきぬなときたまへるありさま、
よめにもうつくしく、になこく』(6オ)きこへぬる人は、^か□なら
す見おとりするにと、心もとなくおほしめしつるに、こよなきちか
まさりも、かひある心ちし給ふ、かみのかよりせひのほと、あなめ
てた、かゝる人も世には在けりと、今そ御心行て、うれ敷おほしめ
す、名にしおふ春の夜なれと、いと程なきこゝちし給ふ、大納言ま
いり給ひて、よく成ぬとうちこはつくり給ふに、と見え御いとまゆ
りかたけ成、御むかひの女ほうとも立わつらふも、大納言は、なに
かしはおろかならむとおもふも心のうちは、忍ふもちすりと見えた
り、春宮は、暮も心なくおほしめして、らうたけ成つる面かけを戀
しくおほえ給へは、ひるいらせ給ひて御覧するに、つほねのやうし
つふと、こゝち(三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)

ある人おゝく御らんしわたす、やかてきちやうにまきれ入給ふ、女
君見給へれば、まことにたかりとうつくしく、たゞ今朝のまゝにて
ふし給へるを、おしのけさせ給ひて御覧すれば、つゝましけに打あ
かめたるにほる色などは、まことにこは何方成しそと御目おとろか
れて、今まゝて御らんせざりし古さへ、とり返さまほしくおほしめ
す、ひくらしかたらるくらし給ひて、暮ればまうのほり給ふに、式
部卿の宮のひめ君の、御けんふくの夜まいり給ひし、せいやうてん
とてさふらる給ふ、若宮さへおはしまして、御心さしもあさからす
見え給ふも、此きりつほいり給ひて』(7オ)のちは、わくかたな
く時めき給へは、其かたさまには、いと心よからすいひあへり、ま
事や、中納言の内侍のやしなひ給ひしひめきみは、月日にそへてひ
かるやうに見え給へは、いみしくかなしき事におもひ給ひて、もて
なし給ふ、此内侍の御むすめに、やかてししゆうのなひしとて、お
なしくうゑに給ふ、いみしうかたちすくれ給へるを、右のおと
ゝの御子にさいしやう、時／＼かたたる給ひけり、ある夕暮に、内
にまいり給へる次に、つほねに立より給へは、いとうつくしきおさあ
ひ人いたきておわするに、いとめつらかにて、ひころは見奉らざり
しに、たか御子か、いもう君にやと問ひたまへは、中納言の内侍の
何方に侍にや養てと』(7ウ)おほせらるゝ、此ちこよく／＼見給
へは、宮の中納言にいとよくにたり、いとあやしくも中納言にいた
まゑる物かな、^た□かはぬ物をとの給ははすれば、かほうち歌て、さ
にもあらむものを、君のゆかりある人に中納言かよひてもうける
にや、行ゑもしり給はねは、思ひわひてもてさすらふを聞て、むか
へとりて□かたり給ふ、いと哀成けるちきりを、いかにして尋さ
りけんとの給ふ、其のよちは、らうたけなりしこの面影、こひ

しく心にかゝりて、中納言行悉しらさりつらむ、つゐてあらはかくと云ひて、気色も見はやとおほしいたりけり、宮中納言は、月日ぞえて、物のみかなしくおほえ給ふに、いとぎりつほのおほへ日にしたかひて」(8オ)時めきたまふと、人もいひさたするを聞給ふにも、わかしくせのほと思ひしられて、かゝるちきりにひかれてまよひける夢ちにこそと覚へ給ひて、何方にもさし出させたまはず、なかもふし給ふおほしも、さい将をはしたり、めつらしくて、ひさしく立より給ねは、おほし忘にけるにやとうらめしかりつるに、うれ敷もとよろこひ給ふ、さいしやうも、まいらまほしきを、おほしあしくもやなとためらひけるほとにこそ、おのつからあれとも、たちよらせ給ひて、いかにうれ敷もなとはふれ給ふ、中納言、心難面かたは御心ならひにか、我はたゞひじり立て、なからふましき心ちのみすれば、なへての世さへあちきなく、はかなき露の』(8ウ)よすか、我身ひとつに思ひなして、かりのやとりも心とまり侍らす、若^なからむあとには、おそなくへたてなかりしよ、あはれとおほし出て給へとうち涙くみて、まことにおもやせ給ひしも、かくてらうたけなり女にて、此さま見たらむに、かならずたゞにはあらしと見給ふに、さいしやう、なににしまてはおほしめす、たかひにへたてあらしとちきりし物を、忘れたまひけるにや、何事もおほさむ事は、かたり給へかし、もろ共に侍らむとの給ふ、身をかへては思ひ侍らんと、けにあさからぬ申契りし事は、いか成る世にか忘れ奉るべきとのたまふは、さいしやう、おそろしの御物かくしやと打わらゐて、」(9オ)

しら露のへたてあらしと契りしにをさゝかはらに心置哉

とのたまひて、ゆゑしの御物うらみやとて、

小篠はら露もへたてすおきみつゝちきりしことはいかゝわすれ
なと云ひたはふれ給ふほとに、日も暮にけりと、とかむへき人もな
ければとて、こよひはとゞまり給ひぬ、夜もすからも、只されたな
き世のはかなき事共の^か□たり給ひて、さても、おほろけにては心に
つく人もなしと、つねはの給へとも、しやうのなひしに心とゞめ給
ふなるは、いかばかりのきちしやうてん女にかと、心にくこそとの
たまへは、いぢや、さまでもおもふ事も侍らす、たゞつゐてに立よる
へきはかりにてこそ侍れ、さてもふしきに聞えまほしき事の侍る、
いまた子もたすとのみ、口きよく』(9ウ)のたまはすれと、いち
しろきかたしろを見付たりし、しらせたまはずやとかたり給へは、
中納言むねうちさはき、たねまきてとありし手ならいも、さたか成
し夢のしるへも思ひ出なから、いかなるかたしろにかとうちあやめ
給へは、けにしらせ給はむや、くちきよくこそそのたまふに、まめや
かに、何方に侍るにか、いとおほつかなき事のあるも、人しれす聞
えあらしはまほ敷おほえつるに、けにいかなるまほろしのしるへに
やと、いとうれしくこそと、まめやかた^か気色なれば、彼しうの内
侍かゆかりに、見かれ給ひぬ、のち行悉も知り給はさりけるを、中
納言の内侍のやしなひけるを、一日もおもはず見奉りし、たゞ御か
ほに」(10オ)露ふかふ事もなかりしかは、あやしきにこまかに問
しかとも、くわしくは申さすとのたまふ、中納言まこと成けりと、
うたかひなくおもひあはせられて、何して侍るか、いくらほとにか、
あはれ見せ給へかしとのたまひければ、こそその冬のころむまれてと

かや聞侍りし、ひめ君にておはします、御覽せ事も、^(10ウ)なとかかたからむ、たゞ御心にこそ、さて其母はいかなる人か、ゆくゑもしり給はぬは、今は何かへたて給はむ、のたまへかしとあるに、としころゆくゑきかまほしく、^(11ウ)明暮むもひわひつるとのたまひて、此よならず侍ける契りを、此人あまりに世をつゝむ人にて侍る、しゝるなひしのしり給ひたれば、さためてきかせ給ひなんすと、いとしらす』
(10ウ) ことすくなゝるけしきなれば、さいしやう、是やへたてありける、我はうらなく、かやうの事も聞せ奉るかひなく、猶へたて給ふは、うらめしくこそと、まめやかにうらみ給へと、さたかに云ひつへき事ならねは、とかくいひまきらはし給へり、明ぬればかへり給ふを、いかに朝露分給ふにか、^(11ウ) こと在かほなりとわつらい給ふ、中納言は、中／＼いふせかりつる月ころよりも、さたかに聞あらはしぬるは、今一しほのそひて、^(12ウ) 残てゆかしくおほえ給へは、さいしやうのもとへ御ふみつかはして、よへたちより給ひてうれしきなど、つねよりもごまかにて、さてほのめかし給ひし事は、いと忘かたきを、ひまあらは、かひあるさまに見せ給へとて、』(11オ)

まれにきて立返りぬる時鳥花たち花を思ひ忘な

と聞え給へは、さいしやう、けに理かほのこうてうは、^(13ウ) おかしく見給ひて、いつも尽せぬ御名残、ことにこよひは忘かたく、夜ふけ侍りて、心ならずとまりて、ならばぬ御ひとりねに、いかにあかしかたくおはしけんをしはかり聞えてなど、いつもたはふれかたきに云ひかはし給ひて、きこえさせ給ひし事は、つゐてあらは見せ聞ゆへきを、御物かくしのうらめしさにこそとて、

郭公立返りぬる其里の花たちはなを思ひこそやれ

うつせみのとのみ、中納言のきみは、おほしほれて、かた／＼につれても、うかりける身のちきりは、如何成先の世のむくひ成けんとして、おほしみたるゝにも、』(11ウ) およひなき雲井のすまひならずは、いかなるいわほうち成とも、今一たひわたののみも在なんと、さま／＼おもひつゝけられて、

泪のみかゝる契りをむすひけん我中山のうらめしき哉

ひめ君の御事きゝ給ひてのちは、はゞきみの事はさしおかれて、今はひたふるに、いかてこれをたにとりて、形見たに見るやと、さいしやうをかたたる給へと、かひなきまゝに、つく／＼とおもひのみまさりて、大とのよも今はかきたまたまひぬれば、北のかためのと、いかに成ぬるにやと、^(14ウ) おもひし敷きあへり、大納言は、つゐにあるへき事たになきまゝ、せめてなくさむやとて、おもふ心にいさなはれつゝ、うちのみ候給へは、おとゝなとは、御うしろみ、』(12オ) 心にいれ給へりとするこひ給ふ、中納言のうへは、あさましくかきたえ給へれば、人も心うく、おやたちのおほさむ事もはつかしく、今に音つれたになきも心うく、

あふ事は今はたえてや山川のをとつれたにもたえはてぬらむ

とのみ誂ふし給へり、きりつはは、いつとなくはるゝよなく、何に昔を忍ふなとおほせとも、たゞうかりし事もわすれたまはて、むすほふれ給ふを、春宮は、如何なれば、つきせすむかしを忍ぶ心なるらん、うら山しきと、ともすれはかゝる御事のみも出る、心うくおほへ給へは、うきにたえせぬ身もうらめしく、あさからぬ御契りをみるにも、^(15ウ) 彼昔も是にはおとりし、』(12ウ) 只おとこといふ給は、いつはりをのみくちなるゝにこそと、打とけかたき御けしきを、つねはうらみさせ給へり、御門は、御くらゐをさしおき給ひ

て、今はしゆしやくゝるんにおりるさせ給ひて、春宮位につかせ給ふ、いとゝ内のけしき思やるへし、きりつほ、御心さしのまゝに、きさきに立給ひぬれば、大臣とのほ、いとゝはなく敷、きんたちも世にめてたく見え給ふ、さいしやうのめのとの内侍になるにも、うかりし昔のこゝち、今そはるゝ心ちして、かくめてたく在ける物をと、はゝ上見たりしかは、いかゝよろこひ給はむと覺えたり、式部卿の宮の女こゝそ、一宮さへをはしませは、さり共と御心にもおほし、よの人も思ひけるに、おもはずに」(13才)かく聞こしたまへる御心さしを、おとゝはかひく敷おほえ給ふ、人のうらみもいかゝとをそろしくをほしめしけり、大納言、いとゝ雲ににおもひたえぬる心ちし給ふ、ちうなこんも、かゝる御事共聞せたまひて、我すくせのほともくちおしく、いかて其忘かたみをたにと、さいしやうをせめ給ふ、御くらゐの初に、かたゝちかくおこなはるゝ、とのゝ大納言大将になりて、中納言は新大納言になり、さいしやうは後中納言なり、さらぬ人々も、みなよろこひ共し給へり、かゝるにつけても、彼人々心の中はうれしくも覺え給はず、忍ふのみたれくるしきほとなり、後中納言は、宮大なこんのあまりのたまはすれは、しゝうのなひし」(13ウ)のもとへをはして、在しちこ見奉りては、つねにも恋しく心にかゝりて、などの給ひ、さてその母は、いかなる人にておはしますすにか、宮の大納言に聞えしかは、見せよと、朝夕せめはたり給ひて、心ならず行ままとはしたりしをと、ゆかしけにおもひ給ふを、何かくるじかるべき、見せ聞え給へかしとおほえらるゝに、内侍、わかばかりにはまかせたらはこそ、母君に申てこそとの給へは、心のほとは見えこえぬ、我はさしもあさからす思ひきこゆるに、つきせすへたて給へは、身のほとこそおもひ

しりぬとて、うらみ給ふも心くるしくて、あまり忍ふ人にかこそとて、かほうちあかめてゐたるさま、さすかにうらみはつきまじきにやとらうたし、しゝうの」(14才)内侍、はゝに、此おさなき人を、宮の大納言の見せよとのたまふなるとかたるに、ないしは、つゝみ給ふことを、うしろめたく、又とり奉らむなどのたまはん、なとにしかをしき聞ゆへきかは、いかゝきゝたまひけん、行ふたにしり給はさりけるに、如何ゝ思ひ出てさほの給ふにか、今は何のかひかと、くねくしけにの給へは、しゝうのなひしとて、敷給ふとこそ聞しかと語給へは、けにいかなる事にか、あやしこそとおほえ給ふ、中納言、大納言をせめ給ふもわりなく、よしなき事、何しに聞え出けむとわひしくて、しゝうのなひしにそうそきこへ給ふ、一日の日、物かくしのうらめしさに、身のほと」(14ウ)思ひしられて、さて聞えさせし事は、いかゝしなしたまひぬる、かひあるさまに取成し給へとて、

敷ならぬうき我からにこり須磨のうらのみるめは猶そ恋しきとかき給へる御手そうつくしき、けにわりなかりし御物うらみは、かすならぬ身は、おき所なく思ひわひ侍る、たゝ忍ぶ人にとて、

ことはりもしらぬうらみの見るめのみかつきわつらふ須磨のあ

ま入

中納言は、かひなしとのみ打おき給ふ、大なこんにも、世をつゝむ人にて、今さらはいかゝなと聞ゆるとの給ふ、大納言いと口をしう、うしと思ひとりぬるもことはりなから、猶思ひすてゝもあるまじけれは、いかゝして少將にたにあひて、此ほと心のうちを少うち出

て、はるゝよ」(15オ)あらむと、ことはりに、せめての事には、内に
まいり給へるつゝには、侍従内侍のつほねにたゞすみ給へは、三
条にて見し少将も、おさなき人いたきてあり、侍従内侍にや、なへ
てならぬ若人の見すてかたきそはいたり、少将など、あはれなとか
ゝるうつくしき人を、(ア)父君のしりたてまつらて過し給ふら
ん、さりととも見たまひたらは、なとかあはれとおほさゝらむとい
へは、いかて聞たまひけるかや、これにまします時きて、ゆかしかり
給ふなるに、見せ奉らはやと、母宮も、いかに見たくおほしめすら
んと、少将、人の心たのみかたきなとゝなからも、さもなさけなく
をはしまし、御いみのほとたえなくて、かきたえ給ひにしかは、大
臣とのゝ出し」(15ウ)奉りて、たゞならぬさへおほせしに、しつ
みふし給ひにし御有様は、けにいひつくすへきかたもなし、かゝる
めてたき御事もおはしましける物をと云ふに、大納言つくゝき、
給ふにも、ことはり過たり、これを忍び過しけむ心のほと、われか
らうしとも中々云ひやるへきかたそなき、是をたに袖のうちにや
と、くやしかなしく、人のおとすれば、立退給ふにも、ありつる面
かけはこひしく、なみたまほろゝとこほれ給ふ、
見るからに露けさまさる忍ふ草上所の形見はかひなかりける
たゞむかしのよさへおもひしられて、いと露けさ袖のけしきな
り、女君は、今は中宮と聞え給ふにも、いかゞ雲のかけはしは、ふ
みとたえぬる心ちし給ふ、」(61オ)おとゝは、みきのおとゝへ
と、つねはの給へとも、大將は、心のうちを知り給はて、世にある
へき物とおほしたるも、いかばかりおほしまとはむなど、思ひつゝ
けられ給ふには、又ひき返しやつしかたきに、一かたならすかなし

く、心は野にも山にも、けふやあすとあくかれ給へは、右のおとゝ
へは、おほろけにてもおわしからず、せめてなくさめかたきまゝに
は、うちに候らい給ふにも、こよなくけとをき御さまなれば、是
を命にて、かけ留めほしきさまなり、明暮さし迎ておはしますらん
御心中も、うら山しく見給ふ、宮の大納言は、在し思ひ草の面かけ
は忘る時なく、如何にして我か物とあけくれ見るわさもかなとおほ
し」(16ウ)なけきけり、少将の宮うふにたにあひて、人しれぬ其
おもひのほとも、きこえしらせはやとおほして、つほねに入て見給
へは、ひやうの上よりおりたりけるに、きぬなともぬきちらしてよ
りふしたるに、大なこんふとさし入給ふに見合て、夢かやと打あき
れて、おきあかりて、いかゞおほし出させ給ひけるにや、昔の心ち
こそし侍れといへは、おとご君も、ともかくものたまはず、なみたそ
まつせきかね給へる、とはかりためらひて、かやうに見奉ること、
さらにうつゝともおほえね、何云ひても、人のとかいとおほえなか
らも、わかふみまよひし夢ちのやみをしり給は、あはれとおおも
ひ給ひけん、いける世の思出には、こよひそいのちなかゝりける」
(17オ)うれしきとて、としころまよひし心のうちより、女君にあ
ひて、といひあらはしたりし打はしめ、三条におもひあまりて行
てみしに、たねまきてとありし御手ならひ見つけたりしかなしき、お
いひやり給はず、しつめかたけなるに、年月うしつらしと、かけた
にいまいとおほえしかとも、つくゝ聞るたるに、我もてきやるか
たなじ、たゞもにすむ虫のわれからとのみかなしく、さてそのなて
しこは、いかにしなし給ひけるぞ、行急ハなにか露はかりもほのめ
かし給はさらむ、およひなき雲のかけはしとけ給はりしより、こよ
ひまてのなけきのえたのしけさなど、しめゝと云ひつゝけ給へる

は、まねひやるかたもなし、けに過にしかたの□^らめしきは、
(17ウ) いさやたとふへきかたなく、御心の名残なさは、ためしも
なくこそおほし侍りしか、なてし子のむれ出たまひて、もてはつら
みしほとには、いかてしらせ奉らん^(ア、)敷しかとも、あさかしかりし御
心のほとに、打出んかたもおほえず、いかばかりかは心うくかなし
く侍りし、たゞ其程の事、をしはからせをほしませ、そのむかしか
ゝる御なさけならは、いかにうれしからむといへは、まことにこと
はりなりや、けに聞えかたそなき、ひたすら昔かたりためしにもし
侍りぬへし、今はうらみてもなきてもあひなき身なれば、もしひま
あらは、此文を御覽せさせ奉りて、其しるし見せさせ給へ、中く
しれがましき心ちし侍れとも、思ひにはけに玉しるも、^(18オ)
あくかるゝにや、心もいつちかいにけむ、筆のたてとも見え侍らぬ
とも、思ひあまりとて、せきかね給へる御さま、いつはりとも見え
すあはれにて、我もなみた留かたく、もろともになくかきりなし、
中宮も、うかりし心もさる事に、むかし忘ぬ御心はつねに見え
て、御袖うちもしほたるゝおりも見ゆるを、いとあはれにこそと聞
ゆるに、いとゝ泪の水上は、せきとむる人もなきにやとみえたり、
かくよ所なから見たてまつり、見たてまつらむ事も、これやかきり
にてあらんすらむ、かゝるうき世になからへても、いまはかひな
し、内に中納言内侍とて候らい給ふは、きゝもし給ひけん、古との
と御いらもにておはしまししかは、かくもてさふ□^らゐ^(18ウ)
奉りしを聞給ひて、とり給て、いかておゝしたてしかなど、あさ夕
かしつきたまふにこそ、たゞ少もたかひきこえ給はず、見奉るたひ
には、いとゝなみたのもよをし成といへは、何とは云ひやり給はぬ

物から、泪のみそ心ふかけにもりいつる、いかていかて見侍へき、
たつねよりも問まほしけれとも、いかさまにもなからうましき身
なれば、何方にも心やすくてあらはなとおもへる物から、心のうち
をたかひにかたりては、なき返するほとに、夜もいとふけぬ、今は
なきてもかひなしとて出給ふ、少将のみやうふも、さすかになれ奉
りし事はおもひ出られて、つらきかたにはおもひくらしつれ共、今
は又あはれなる御気色なれば、心にかゝりて、^(19オ)夜もすか
ら歎めふしたり、ひるつかた御前まいりて、見まいらすれば、上も
おはしまさて、しめくとしつかなるに、過にしかたのおほしいて
たるや、御袖も打しほれつゝなかもふし給へるも、みやうふおりう
れしくて、よへの文とり出して、のたまはせし御事、なけき給へる
けしきを打なけき、心ふがけにおほしとりし事ともをかたるに、つ
くく聞せたまいしに、まことにたゞ事とおほえざりしを、何に
成りけるそと思ふものから、たえはてにしあまのかるもの心つきな
さは、いかて見しきかしておほししかとも、さすかにいとあはれ成
し面かけ、さしむかひたりしよなくの月影は、恋しく思ひ出られ
て見給へは、^(19ウ)

なれ初し事そくやしきかくはかりあふくま川のおさきちきりを
おのつからことのはゝかりおもひ出よひく手になひくならひ在
とも

雲の上にひかりをてらす月かけもうらてふ山に我そいりぬる
とかけ給へるを、まことにいかに思ひ出けるそとやと、あはれさも
よのつねならすおほえ給ひながら、今更いひかばさんも心つきなけ
れはかひなし、宮の大將は、みやうふにあひてほのめかしはてしよ
りは、中くなる物思ひの花のみ咲まさりて、心ほそさもせんかた

なくおほえ給ふまゝには、日にしたかひて物なとも見入給はず、な
と一くたりの返事たになからむも、うらめしさもとりかさねたり、
たゞ我かうきからにやとおもひなしたまへと、猶人はうらみ多く、
よろつおほしつゝけられて、」(20オ) 過にしかたのおもひは、數
ならさりけりとおもふにも、露はかりもおほししぬ物ゆへ、かた思
ひ成もよしなくおほえ給ふまゝに、まめやか心ちもゆるしくよは
しくおほえ給ふ、よしなきおもひに身をかへつるも、我ながら
よしなく、おのつから御こゝろのみたえかたきにやな給ふ人は、忍
ふ草をも、わか物に見るよもありなむ、そのかたみとも見はやお
もひつるも、なからふましき身なれはいとかひなし、やうく秋も
ふかく成まゝ、さらぬ人たにあはれなるへき風の音に、ましてこの
御身共には、木からしのみおほしはれて、木の葉共にさそはれぬへ
きこゝちし給ふ、

人しれすおもふ心は秋の露身を木からしにきえ返りつゝ』
(20ウ)

おほしつゝくるにも、人やりならず心ほそくおほえ給ふ、虫のこゑ
つねよりもうら山しく聞はたり給ひて、なみたの露は、袖より
外おきはたさす心ちしてと、れいよりもかきつゝけてかなしきに、
小の琴のかたはらなるを、女君の見を初めしよひひき給ひし物を
と、音さえなつかしくて、少かきならし給へは、いと御こゝろの
みたるれば、琴をよしやりて、

人しれす音のみだつるからことのひくてもたゆくぬるゝ袖哉
在明の月いと心ほそくさし出たるに、なかめしかけもおもひ出られ
て、

いかにして又あふ坂の関こえてみし夜の月も影とならへん

うき雲しけきとのたまひて面かけも、いかにして」(21オ) 此世にて
又見るへき、いかゝむすひし中のおそとおほしつゝくるに、さやか
なる月かけは、かきくらさるゝ心ちして、雲まなきおりふし、人を
思ひ出て恋しければ、

山のはの出るも入もかはらねとふたりみし世の月ぞ恋しき
(21カ)

おほしつゝくれと、たゞかひなし、けに見し面かけは、此世外に成
ぬとも、忘給ふへしとおほえす、一すちにおほしつゝみぬれば、
おきもあかり給はず、うつもれふしてのみおはするを、父宮母上な
とは、おほしさはきて、御いのりいたらぬくまなし、すほうなと、
おほしさはくに付ても、露のいぢきえはてなむ後、いかばかりお
ほしなげく覽と、返りよしなく思ひ給ふ、

人しれぬ思ひにつるに身をかへは心のやみに猶やまよはむ』
(21ウ)

とうち詠めつゝ、大将御とふらひにおほしたり、さるへきかたにい
れ奉りて、思ひ念しておき給へり、在し人ともなくあをみやせ給へ
るは、中へ心くるしけなるに、つくくを見給へは、いかなる御
心ちにか、いみしくこそをとろゑさせ給ひければ、大臣とのなとも
いとおほつかならせ給ふを、哀にもおほしませかしなのたまへ
は、何となく過にし比よりなやましく侍りつるに、つゝみになからふ
ましきにや、よはしくさる侍るを、其にもまいりたく侍るを、
おやたちのおほつかなかり給へは、えまいらて、かきりあらむみち
のほたしともありぬへく、おほしもとへるさまの心くるしさながら、
無跡にはかならずおほし出よとの給ふに、大将、」(22オ) これほと
の御事とおほえさりつるに、かくまてよはしく成給ひけるこ

そ心くるしけれ、いかにおほしまさむ道にも、たち送れ奉るへしともおほえぬ物をと、あさからぬ御気色なれば、たかひに袖をしほりつゝ、かなしと見えたり、返り給へる道すからも、よはよはしけなりつる御面かけ、心にかゝりておほえ給ふ、大臣との御かたにまいり給ひて、宮の大納言こそよはしけに見え侍つれ、如何るへきにやとの給へは、又おとゝも、いかなるこゝちにか、いとふひんなるわさかなと、御目をおしのごひ給ふ、まして女君は、うかりし心の程はつらけれと、今はと聞には、さすかにいと哀にて、打なき給へり、中納言もかくと聞給ひて、いとよはしけと(22ウ)しけなる御けしきなれば、中納言、いかてかくまでおほしましけるを、今まゝてうけ給はらて、まいらさりけるあさまじさよ、むかしより、さしもへたてあらしと、さしもちきりしかひな□などのたまふは、ことさしてくるしき事は侍らねと、其事となく物のみ心ほそくて、つるにかく成り侍りぬれば、此世に思ひ置事なれば、いのちおしかるへき事はなけれ共、たゝおやたちのおほしまとはんさまの、つゝることゝはおほしものとめす、目の前ならむわかれに心を盡し給はむ事の、かきりあらむいのちも心うく侍り、のちの世かならずとふらひ給へとて、うちなき給ふ、中納言も打なきて、(23オ)さしもへたてなくちきりし中に、今いとおほさむことは、たゝのたまはせよ、もろこしのみよしのゝ山を夢ならてと在とも、いなふへき心ちせぬとて、いとあはれけなる御けしきなれば、人のとふまで成にけるを(24、)はつかしけれと、いにしへよりあさからさりし心さしのほとも、ありがたくおもひしられ給へは、今はのきはにも、よしなくそゝろなる事に身をかへぬるは、後の世までもつゝみ侍れ共、あさか

らぬ御心さしのほとも、むけにおもひしられてやとて、ほのめかしきこゆ、いつそやのたまはせし怒ぶ草のゆかりを、心ならずまとはして、とし月おもひなき侍也、後世さまたけにもやとおほし侍るとの給へは、さてその(23ウ)ゆかりはかなふまじきにや、いかなる人にておはしますか、しゅうの内侍にも、いかに聞しか共、あなかにかくし侍しかは、心つきなきかたもやとてすき侍る、心くるしき御事にこそとのたまへは、あるしの君、いかなる世にかかなひ侍らむ、しり給ひたるらむ、こあせつの大なごんは、むすめたゝひとりもちたりけるを、ちゅうせてのち、おもはずに見そめてより、あさからす思ひしに、大臣との(24、)あたより、いかなる事かおけん、我にもあらず心かきみたれて、此事露はかりもおもひいれられさりしに、かきたえにしおりしも、たゝならすさへに成けるに、母君うせてのち、大臣殿にたりむかへられて、春宮にまいらせてけり、(24オ)ちかきほとにて見聞て、いかはかり思ひつらん、我なからたにつらく心うきに、のちにこそうけ給りて、ふるさとへまかりたりしかは、いと心ほそき手なひともしおきて侍りしを見し心ちおほしやれ、なてし子なのたとありしを、いかなる事にやと、いふせくおほつかなかりしに、のたまひ出たりしをうれしかりしかとも、いとゝそれよりかなしくと、こまゝかたり給へは、中納言いとおはれにて、今そまことにおほしけるとしり侍りけり、さてはことほりにこそ、さりなからにも岩にも松は生ふるためしなくやある、おのつからあらはあふせも、松に心かけ給へかし、其怒ぶ草とりて、形見とも見聞給へかし、けに後の世の御事は、(24ウ)若送奉る事もあらは、いかておろかなるへき、誰千とせならぬ松ならば、身はおく

れ奉るへきかはとて、いと心ふかけにうちなげき給ふさまとも、いとあはれなり、たかひに名残をうしみながら、なく／＼かへり給ひぬ、大納言は、日数積まゝに、いと心もよはりはてたまひて、すてにかきりとみえ給へは、宮母君は、さらに立おくれしと、御いのりのさうつそりしやう、たちさわきつゝ、手にあせをにきりての、しれとも、そのしるしもなし、たゞあさかほの花の露日かけまたぬ程にて、きえはて給ひぬ、おやたちのなげき、おくらかし給ふなと、ぶしまろひ給へともかひなし、おもふにきえぬならひなれば、さてあるへきかはとて、むなしきけふりと」(25オ) たくへ奉るも、夢のこゝちそする、かなしともよのつね也、おやたちも、かひなきいのちもいぎとまりたまへるもかなしく、ほれまとる給へるもことほりなり、御いもうとの女御も、おほしなげく事よのつねならず、中納言もかくと聞給ふに、哀ともなのめならず、こま／＼の給ひし事とおほし出られて、いつかわか身のと、いとあちきなふ、御なみたもところせきほとなり、内にも此よし聞しめして、さしもあたりしきかりしありさまをと、おしかなしくおほしなげく、中宮の御かたにいらせ給ひて、いとあはれなる事こそ侍れ、宮の大納言こそはかなくうせにけれ、まいらさりしほとたにつれ／＼成つるを、あたら物をと、まめやかに、あはれけに」(25ウ) おやたちの、いかはかりおもふらむとて、打なかせ給へは、中宮聞給ふに、けにかなしさはよ所なからたにあるに、今は見るまじきにやとおほしつゝくるに、さりけなくもてなし給へと、御なみたせきあえかねたり、なみたよさの海物な思ひそと、打はらゐて忍ひ給へとも、いと流出るもわりなし／＼あやしき事つねはましりて、誰はかりなからむとおつゝなつゝつるは、さだかりけりとおもひちはせつれだへとも、さ

にやなと打出給へは、わりなくくるしき御事にし給ふかいたわしさに、うちまきらし給ふ、少将のみやうふ、哀成し御けしき思ひ出られて、内侍とふたりして、忍ひつゝなきゐたり、おと聞給ふに、あさましとも」(26オ) よのつねならず、女君と聞給ふに、今はあひ見る事はたえにけるやと、かなしともよのつねならず、かけひの水、をとつれもたえ／＼にのみおはししかは、人しれすつらきかたにはおほししとも、うつくしかりし面かけも忘かたくて、ねをのみなき給ふ、とにかくにかゝるうき身のなからへて何にかせむ、たゞ様をかへてのちの世をたにとおほせと、大臣とのほし君、よもよき事とはのたまはし、さしもなかりし身のほとに、そむきはてぬも、さすか人めおこかまし、とにかくにうかりける身のほとに、心うくおほえ給ふ、との大将も、よろ共になれしことのみ思ひ出られて、いとよろきにも、すさまじくかなしければ、ことほり過たる御なげきとも、」(26ウ) すゑの露、もとのしつく、おくれ先たつためし、しやうしやひつめつのはりなれば、今さらおとろくへきうき世なれと、いきの松はらいきたる人もおふければ、きのふけふとはおほえさりしに、いと夢の心ちして、かなしさもさめやらすせんかたもなし、

あさかほの末はの露の上の中にきえ残る身そはかなかりけるなどおほしつゝけられて、あちきなくおほえ給ふ、まことにや、宮の大納言の書置給へる御文とも、御めのとの式部の大夫、中なこんのもとにもちまじり、いかにや夢心せしを、やう／＼やう／＼日数つもるまゝ、さめやらぬこゝちを、いかはかりおもひ給ふらむなとの給へは、しきふきやうのたゆむ打なきて、さらに送奉りて、」(27オ) けふまはなつゝふへしともおほえさりしに、うききたえ

ぬ命のつれなさは、とまらて侍へき心も露おほえすといひやらぬけ
しきも、いとあはれなり、此文見たまえば、

今世にも契りはくちし人しれすふかく頼は君か面影

こん世までおもふこゝろのかはらすはおなしはちすの露とおか
れん

しるへせよおなし木かけにやとる月雲かくれなん後の世までも
おもあまりてきゝ出し事、あなかしこ、心より外にもらし給ふな
よ、くちぬかたみは是はかりにやとて、

もしほ草かたみ計と恐れはあと千とせもくちしとそ思ふ

いまさらけうき名もたゝしから衣袖より外にもらすなよ君

など、よはくしけに見ゆるかけさま、めのみきりふさかりて、(27
ウ)かほにをしあてゝ、こゑもたつへくみたれかはしき御さまなり、

夢とのみたとりわつらふ別哉入ぬる月の闇のまよひに

しるへして運すの友とせむ今世を頼みたのちかひに

なと云そへ給ひても、けに長世のかたまよと、あはれにおほえ給
ふ、しきふきやうの大ゆふもなくく帰て、(マ、)小将のみやうふに御文
つけきこゆ、中宮忍ひて御覽すれば、

君ゆへに身をいたつらになしはてゝまよふやみちを問すもあら
なん

山の井のたゝ浅からぬ契りゆへ身をかへぬとも人はしらしな
此世こそつるにわかひの道ならめかならすめくりあふせあらせ
よ

とかき給へるさまかはらす、筆のたてとたゝ見る心ちして、人めも
つゝまれす流なみた河は、いつなかれやむへしとも(28オ)見え
す、御かほにをしあてゝ、うつふしにふし給ひても、はかなかりけ

るちきりのちきりのほとのみかなしとおほしつゝくる、むかしろう

さは忘られて、今は又こしかた行末の事のみおほし出られて、なか

めふし給へり、宮の大納言の母上御さまかえぬ、しきふの大ゆふも

しゆつけて、もろともにおこなひ給へる御さまとも、真とにあは

れなり、せめてのおもひなくさむやとて、はゝろゑ、大なこんのす

み候らぬし所におはして見給へは、つねになかめふし給ひししやう

しのもとに、御心ちのくるしくよはく敷のとおほえて、

かたみとも誰か忍はむたねまきて行ゑもしらぬ撫子の花

たらちねの心のやみにいと敷くらき道にも入ぬへき哉(28ウ)

撫子の花のあたり尋見よはかなくきえぬ露の形見に

なと誓置給へるさま、すみつけなと只今のやうに見るも、めも暮、

心もまとひて、きりふたかりて見え給はねとも、しゐて見給へは、

たつね見よとあるは、さは忘かたみのありしやと、いまそ心得ぬ

る、なとかけてものたまさりけむ、いかなる所にかあるにか、あは

れ尋ね見はや、明暮はいづく成らむと、ふしまろひなきかなしみ給

ふさまことはりなり、いと敷のそひぬる心ちして、

夜も深く雲陰ぬる月かけのやみちにまよふ敷をそする

とおほしつゝくるも、われなから物のおほゆるにやとかなしく、月

日過行と、御なけきはいと茂りまさりて、(29オ)露けき御袖

のけしきなり、年もかへりぬれば、霞たちはたりて、空の気色のと

やかに物かなしきに、たゆふれるの梅の花さき、きやうろさんのか

らもゝは、いまたひらけぬにころなれば、四方の木末も所くには

ひはたるを、つくく詠め給ふ、大将は、さらぬたに人やりなら

ぬ思ひのみ月日にそへ、袖のなみたまかすまざるこゝちし給ひて、
山のあなたへとのみ、御心はかよひ給ふと、いとよかゝるさためな
き世のならひとおほしつゝくるも、いつまでとのみ心ほそきなくさ
めにも、宮の大納言の、つねはわかやとの花ことにめてたしとのた
まはせしも、今はさかり成るらむと、ゆかしく思ひやられて、中納
言さそひ給へは、(29ウ)われもおなし心におほえ給へは、もろ
ともにおはしまして、ぬしなきやとのいとさひしきこゝちするに
も、花は物もおもはぬにや、さかりに咲みたれたるも、殊にあさ清
めせぬ宿の塵のけしきも、かくこそ見るへけれと面白につけても、
大将おはしまししかは、いかに待よるこひ給はむと恋しく、泪のみ
こほれ給ふ、

たつねつるかひこそなけれいと桜花のあるしははかなかりけり
とうちなき給へは、けにもとうちなきて、

糸さくらむすひとよめて別にし花の主こそ面影に立

なと打なかめ給ふほとに、宮かくと聞給ひて、さしもあさからさり
し御なかめなれば、かたみとも見まほしくて、おほしつゝみ給ふ
に、先大納言の事おほし出られ、(30オ)打なき給へり、此御さ
ま共の、大なこんとのゝににたまへるつけても、めもくるゝ心ちし
て、いとあはれ成し物かたりたかひに聞え給ひて、暮ぬれば、名残
おしなから、うちしほれてかへり給ふとて、しゆしやくゝるんわたり
をとをりたまふに、何方も春のといひなから、花の木すゑもことに
面白咲みたれ、てりもせずもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜の體
はたるを、にる物なしとなかめふし給へる折しも、琴の音ほのかに
聞ゆるを、立とまりきゝ給へは、わさとならすたえ、忍ひやかに

るを、ひく人はおくのかたにやと、立より給ひて見給へは、御せん
にも人すくなにて、木丁(30ウ)をしやれたればほのかに見ゆ、
若人々火ちかくて、絵なんと見るにや、さしつとゐたり、ひめ宮に
てやおほしくて、おくのかたに、きんをたゝひきまさくりつゝ、
火をつくゝと打なかめ給へる御在さま、さたかならねとも、なへ
てならすうつくしけに、まことにけたかきかたはすくれ給へり、ら
うたけなる御ありさまをよく見給へは、わか心をつくし奉る中
宮にいとよくに給へりど、大将はおほえにも、つゝにかなけて過に

しおもひのなくさめに、かゝらん人を見奉りは、世にあるこゝちも
せましと、いつしかうちつけにおほえ給ふ、中納言は、いとめつら
かに、かゝる人見たまはぬこゝちして、めかれもせずまほりたま
ふ、たかひにひとりならば、身はいかにもならはいかに(31オ)
せん、たゞ今もはひるへきこゝち共し給へと、さすがにかゝると
おほして、人もこそとかむれとて帰り給ふ、道すからも、ありつる
御面かけ心にかゝりて、中納言に、かゝる人や見たまふ、われはい
またこそ見ね、宮の大なこんの、心につく人あらは、よのはかなさ
もしられしと、つねにのたまひしもおもひ出られてとのたまふは、
よしなきほたしも何かはせむ、かゝる憂世には見えぬ山ちのみそ恋
しきとのたまふ物から、御心の中は、人しれすいかにもして、おも
ふさまに見奉らはやと、たくひなく面かけ心にかゝり給ひて、過に
しかたの事は、いとと思ひたえぬれば打おかれて、今は是のみ思ひ
みたれ給ふ、中納言もいかにしておもふさまに見奉らはやと、(31ウ)
ひとりならぬ思ひのたねそへぬる心ちして、いとよなかめ
かちにのみをはします、又の夜、ほのか成し面影忘たたく心にかゝ

る心ちして、人の音もせねは、在しかうしのもとに立よりて見給へは、みなねぬるけしきにて、火はまたきえやらてほのかなるに、姫宮のふし給へるにやと見ゆるところもくもりなきに、やはら入給ひて見給ふに、やはらかなる人のいづもふるまひ給へるなれ、忍ひ給へる聞付る人もなし、御とのこもりたるにやとおほゆる木丁のそはに立より見給へは、御めのとこの中将の君などいへる、御あとのかたにふしたり、ねいりたる御さまなれば、いとうれしくおほえ」(32オ) 給ひて、中へとかくあへしらぬへきならねは、かろとときいたきまいらせ候て出給ふに、ひめみやこはいかにとあきれ給ふ御在さま、御ことほりなり、中将もうちおとろきて、あさましともよのつねならず、いかにと心まとひせられて、うちつまいりたれば、ともかくものたまはず、さらばむなくこそとて、御くるまにのせ給ふに、いはん哉かたなくあきれたり、ひめみやも、たゞいまそ覚ぬる□ちし給ひて、なのめならずおそろしく、猶夢か〜とおほし給へる御さま、大将も見たてまつり給へは、たゞ中宮の御在さま、其かとまておほえ給へる御さま、わか明暮かひなき事をおもひなく心のうちを、ほとけ神のかゝるかたしろをつくり出し給へるにやとおほえ給ふ」(32ウ) にも、いとあはれにて、見たてまつり給ふ、おはしつきたれ共、ひめ宮は、御車よりもおりさせ給ふへくもなく、あるか無なる御様なれば、おとこ君かきいたきておろし奉り、やかて木丁のうちへ入たまいぬ、中将の君、うつともおほえず、いかに成ぬるにか、こは何ぞ、夢ならはとくさめやせんと思ふにも、問ふへきかたもなし、たゞ物によくまよはれたるこそ、見まはしても、うはの空なる心ちして、物もいわれず

打わなゝかれたる、おとこ君は、おもひぬる事かなひぬる心ちして、さりとともよもさのみは、おほしいりたるも心くるしく、いかにしてはれ〜しく奉らむとのみ、そる、□まひて、とよかくよとなくさめ奉り給ふ」(33オ) かの宮には、あしたはるかになる□て、御とのこもりぬるにやと思ふ、あまりひさしくなれば心もとなくて、御めのとまいりて、御木丁の内見まいらせければ、おはしませねは、こわいかにと心まとひもよのつねならず、あきれさはきけれとも、何方におはしませむ、をしへなへたるたくひならはこそ、こゝにもや、とよもにやなとたつねへきに、如何に成給ひぬるかとなきゐたり、ゐんきこしめすに、あさましきともよのつねならずや、さしもうつくしき、たくひなかりし御在さまは、いかになし奉らむか、よも物なとはとりたてまつらし、たゞに人々か心あはせてけり、いかなるすきものともかしはさなるらむ、母宮うせて後は、明暮」(33ウ) くるしき事に聞えつるを、かなしく口をしくおほしめす、中将付たてまつれば、御めのとこのなとこのこゝろへぬるにやなとおほせらるれば、かけて日比あや敷事も侍らすなと申せ共いとかひなし、中納言さるゆへ共ありて、ひめみやうせ給ひぬと聞に、むねうちさはき、ほのか成し御面影忘る時なく、あはれさたかに見たてまつらはやと思ひしを、大将のとり奉しにやおもふに、ねたくちおしくおほえ給ひて、けしきもゆかしければ、大将のもとにをはしましたり、ひめみやともろともに御とのこもり給へり、中納言、れるに習て、すく返と御まゑのかたにいり給へは、あるしきみあさましくて、今それにまいらむと、れるならすの給ふ、中将ハ

ら」(34オ)あしくもおはしますかな、うちとけたるすかたは如何にもこそとはらひ給ひておはしましたり、ひんくき□こし打ふくみ、ねあかみたまへるしも、かうてこそとうちまほられたり、いかにれるにならひてまいりきつるを、心はかりかとよ、へたて給ふはと打たはふれ給ふも、先宮の大納言にかくうちなれし物をと、たかひに云ひ出て、つきせぬ恋きこえ給ふ、中納言、さても在し物かたりしりて、そのうちいさなひ聞えたりしに、まことにかうせ給ひたりしとて、めんもなげかせ給へるうけ給はる、いとあしくこそ、誰はかりかはおもひより奉るへき、さやうさやうのむけにへたて給へるにやと、たうらみたにうらむれば、いとわりなくて、いさや、いかて」(34ウ)しり奉るへき、何かはへたてまいらすへき、我らも其後心にかゝりたるに、いかにしてうせ給ひぬらむと、いとつれなくあらかひ給へは、まめやかにうらめしけにて、さもくちぎよくのたまはる、さそ心なくおもひ給ふらむとてかへり給へれば、こよひはとまり給へかし、けにしつこゝろなき御在様、うらやま敷とゑんし給へは、中納言、御心ならずやと、つきせすたはれ給ひて、暮ぬればかへり給ひても、彼しゆくせの程うら山敷、明る夜麥り給ひけるにや、われをいさなひ給はさりけん、口をしくおほしめしつゝ、いかてさたかに見あはせする事あらむとつかゝい給へり、ま事や、在し忍草を、上所の軒端におひ給へる中宮は、」(35オ)さすか人しれすゆかしくのみ、うみおしたりしよりほかに、うかりしゆかりとおもひしかは、さたかに見る事もなくて、やかてないしの、していいしの時、ほのかに見し面かけも恋しく、又むなしくき

うらやま敷とゑんし給へは、中納言、御心ならずやと、つきせすたはれ給ひて、暮ぬればかへり給ひても、彼しゆくせの程うら山敷、明る夜麥り給ひけるにや、われをいさなひ給はさりけん、口をしくおほしめしつゝ、いかてさたかに見あはせする事あらむとつかゝい給へり、ま事や、在し忍草を、上所の軒端におひ給へる中宮は、」(35オ)さすか人しれすゆかしくのみ、うみおしたりしよりほかに、うかりしゆかりとおもひしかは、さたかに見る事もなくて、やかてないしの、していいしの時、ほのかに見し面かけも恋しく、又むなしくき

ち、猶さいしやうの三み、さにこそと思ひて、あはれ見せ奉らはやと、少将のみやうふと云ひつゝうちなきける、いつもの春と云ひながら、のとかにうららかなり、しつかにて、くわさんのゐんに行幸ありて、花のえんなるに、ことにのみ長閑なれば、よきひまとおもひて、三位の中納言の内侍のもとに、さもおほしめしかれかしとせうそこしたりければ、我も思ひ」(35ウ)なから、をといかにそやなんとおもひて過しつるに、うれしくとて、やかて内侍くし奉りたまへり、御くるまよりおりさせ給へる、いとらうたけにて、こうはい句は人々に、もつきのふたへおり物のななき給ひて、にほやかにうつくしく、今よりはつかしけなるけそいたへるは、たゞ過にし人の御かほに、うつしとりたらむやうに見え給ふにも、とりあへぬ御なみた、ほろ／＼とこほれぬる、ひめ宮、れるならぬ人をおほして、打しつまり、はちしらぬ給へれば、内侍、うつくしくおはします人こそ、君の御あねきみよ、いたかれ奉りたまふと申給へは、うちうなつく物から、さそかにちかくより給はず、物なと云ひて打わらひ給へる様、」(36オ)たゞ大納言にすこしもたかひ給はねは、さいしやうのみみ、少将のみやうふなどもあはれにて、いかてひころ見奉らせ給はて過し給ひけんといひつゝうちなげは、姫君も、あやしけにてまほり給へるさま、らうたけうつくしけなり、中納言の内侍も、あはれなる御物かたり申給ひつゝ、むかし今の御物かたりに、日もようやう暮行は、今も、うちも返らせおはしますすらむとて、ひめ君くし奉りつ、さいせう、おかしけなる衣はこなと、忍ひつゝ送りけり、中宮は、在るおかけ心にかゝりて、むかし今のおもひ、ちぎくらしきはしみたれて、つきせすめつらしけに、い

くつれつれとおほしめされめされけるにや、面白おほえ(36ウ)なむ、しつ心なかりつるをなとのたまはする、中宮は、袖のけしきもしるからむと、いとつましくて、打そはみ給へるを、ひきむけたまひて、たはふれさせ、御あひいとふめてたし、二月の比よりたゝならすなやみたまへは、いかなる御事にかと、うゑおほしおとろき給ふに、やよひのころにも成ぬれ、いちじくるく見えさせ給へは、うれしき中にも、又いたはしくおほしめさるゝ、其ほと出給はむ御事心もとなく、今よりおほしめしなけかるゝ、人しらさらむとは、しはしかくてをほしませとおほせらるゝ、やよひの廿か比にも成ぬれは、大かたの花木桃、やうく残なくちりまかひて、木すゑ物いと物さひしきに、青葉ましろのおそ(37オ)さくら、いとめつらしく咲みたれ、春の末葉のもろともになかめさせ給ふに、あさみとりなる空の気色、おほろに物かなしく見ゆれば、いつよりもつれくとをほしめされて、御あそひせさせて、御心をもなくさめ奉らむとて、てんせうにたれか御たつねありけるに、中納言、ひやうゑのすけ、しゅうさいしやうなどさふらむけるとさうすれは、さいしやうのおわせねは、めしにつかはす、大將は、つきせすあくかれ給ひし心に、姫君見つけ奉りてよりは、いとよはるゝよなかりしかたしろもなくさむこちしてそひおはずに、めしあれば、いと心くるしくおもひ奉り、なくさめかたらひてまいり給へり、過しよかたきさまなるを、こよひなくさめられよ(37ウ)かして、大將よこ笛、中納言ひわ、兵衛佐はせうの笛、しゅうのさいしやうきんの琴、みなくおのく心にかならし給ふにも、さしも名高きこえ給ふおはしますと、心ようもよのつねならず、大將は、こよなく

慰給へとも、おもひ初し心はたえねは、見し御在様は、忘かたく恋しきに、たゝ今うちなやみおはしますらむ御ありさまは、ゆかしくそおほえ給ふ、されとも、打しめり物おもはしけにのみ見え給ひしに、今は明暮おもふさまなる人を見給へは、あらぬさまに成たまへる、中納言は、よしなきせうなる物うらやみに、おもひそひぬる心ちして、打しめり物なけかしうなる気色にて、かきならしたるひわの(38オ)手つかひはち音々と面白、よこ笛空の上まですみのほる心ちそする、さまく手を尽し、心おちにて、あはれなるよのけしきにさそはれつゝ、残る手なくあそひ給ふ、うゑも御なみた、うゑも御なみた、聞せたまへるにも、宮の大なこんのあらましかはと、うちをほしめまいらせて、人うち忍ひつゝわひ聞えけるを、中宮も、此大將のうちふる舞を、こよなく其かとまてに給へるもおほし出て、なみたくまるゝにも、けしきもやはる覽と打のひ給へ共、おのつからみやうふなどは、奉りても、我もうちななかれけり、夜もふけ行は、みなまかて給ふぬ、大將は、心も空なる心ちして、いそぎ出て給ふ、ひめ宮は、ともそれるんのおほし(38ウ)めすらむ事もあさましく、いかゆく多なく歎かせたまふらむと、わするゝ世なかななく詠めふし給へるに、おとこ君をほしまして、さまなくさめきこえ給ふ、中納言は、こよひはやかて御とのあしたまひても、大將しつこゝろなけにて出て給ひつるけしきも、まめやかにうら山しく、たゝさにこそおほえ給ふに、あふせもかたきのみまさる心ちして、みたらし河の御敵も、神はうけすものならひも、我身ひとつにやと打くんせられ給ふ、今はしゅう内侍にも、たえく成給ひぬるを、内侍は、在し事を聞えさりに、うらみ給ひ

けるにやと、心うくおほしけり、しきふきやうの宮は、月日のつも
るまゝに、いとよしき」(39オ)御なさけのみ、はるよなくおほ
しこかれて、行姿もしらぬなてしこのときおき給ひしもこゝろに
かゝり、さやうの事たにあらは、かたみともなくさみなまじと、う
せ給ひし時より、もしやとさるへきたよりはたつね給ひけれとも、
かくとほめかす人なければ、聞ゆる人なければ、それにつけて
も、つきせぬ御泪はかりそたえぬる心ちし給ひけるに、さるゆかり
ありて、おもひかけすはのかにきこゆる人あり、はははたれとも
しらねとも、中納言の内侍のもとに、やしなひたまゑるとかやと申
人のありければ、うれ敷おほしめして、内侍の方に、さやうの事お
はしまさはと、たひ／＼聞え給へは、ほひなふおほして、たしかに
き」(39ウ)給へる事なれば、たゞとき／＼御かたみとも見たて
まつるへきよし、あまりに敷給へは、中宮申あひて、さらは母をた
れとしり給はずはいか／＼せん、おもふあまたおはせむこそよき御事
なれとて、いみじうつくしけにしたて、とき／＼わたし給へる、
まぢ見奉り給ふおうちうは君の御心、かなし共よのつねならず、さ
しもにたまはさらむたに、其御形みと聞たまはむに、なつかしくい
と／＼しかるへきに、是はたゞ大納言のおそなくおはせし御ありさま
に露たかひ給はず、うつしとり給へる御かたしるは、中／＼なる御
なさけもよをしなり、御心いはるまか／＼敷つゝみ給へ共、大なこ
んのうせ給ひし時にもおとらすて、」(40オ)御めのとのさしつと
ゐてなき給ふさま、ひめ君はうちあやかりておはす、そのうち、こ
ゝかしこにつねにおはしかよひ給へり、御孫の一宮こそおうちのみ
やへおはしつゝ、つゝ、おほしきつゝ、二、是か今やむ

なしき御かたみと見奉り給ふは、時の間も見奉らてはいかゝとおほ
しけれとも、つねにておはしましける、中納言は、やう／＼夏秋も
暮て、神無月初にも成ぬれば、虫のこゑ／＼も鳴よはりつゝものか
なしきにも、我身ひとりとのみ鳴くらし給ふ、風のけしきもまこと
にすさまじくて、打時雨る夕つかた、大将のもとへ、猶けしきもゆ
かしくておはしたり、たゞすみ給ふ折しも、ほかよりはしらせかほ
なる空の」(40ウ)気色、木のはさそふあらしの音にまきらはして
見給へは、打とけて、みす少巻上て、木丁などもおしやりて、池の
汀の松のかたはらにいとめてたき紅葉、庭のにしきのちりちらすみ
たれあひたるを、さそふ嵐のなきほとなり、ひめ宮、菊のうつろひ
たるもみちかさねのこうちき／＼給ひてゐたまへり、何とはなくこほ
れかゝりたるかみのかゝり、やうたひひたひつきなとのそきめは、
あふきひろけたらむこゝちする、在しかひかるとは、これをいふに
や、あたりもかゝやくはかりなり、よの外成したにめてたし、まし
てさたかに見あらはしぬるも、我身のほとこの心うさ、もろともここ
そ見初しを、いかなればわか物と、明暮見たて」(41オ)まつらむ
と、口をし／＼おほえ給ふまゝ、御なみたさへこほれつゝ見奉り給ふ
共、あく夜あるへし共おほえす、夜もふけ行は、やはら立出て給
ふ、在つる面かけの忘かたくて、

うらにたく海人の釣するかゝり火のほのかに見つる人そ恋しき
と打歌て、返り給ひぬ、おもはし、よしなしなと、さりけなくても
てなし給へとも、ありし面影は忘かたく、よしなくや身をや返まし
と、いとゞ世の中を、物のみかなしく敷れ給ふ、嵐にたくふ木のは
の音につけても、いとゞひとりねのみあちきなく、けにうき世のさ
ため、さは今にはしめねとも、宮の大納言えはてにしありさま、

目のまゑに見るく、わかれ給ひにしかなしさは、』(41ウ) 月日へたよりつゝも忘る時なく、さしもめてたかりし在さますかたむなしく、その面かけたに、めてたかりし御あり様すかたむなし、そのおもかけたに遠さかる心ちして、つねよりもこひしうかなしければ、はかなきかたみ計と書置給ひし物共とり出て見給ふに、いふくかきなされたるすみつき、もしのなかれはくるしくて、日をへにしかは、さこそかはりはつらんに、たゞ筆にまかせて見ゆるも、つきせすかなしくておほえ給ふに、我もいつまでのおもほえ給ふに、いとゞ世の中もあちきなく、うき世をおもひすて、後世をたにねかはまほしくおほさるゝ、今は一すち此かたみを心にかけ給ふほとに、しゅうなひしにも久敷』(42オ)かきたえ給ひしを、さすかに、いかにおもふらむとおほし出て、たゞすみ給へは、いと心ほそけに打なかめて、くまなき月もすさましく、しゐてはしつかたに詠めいりて、袖もところく打しほれて、

くる人もまれに成ぬるよなくは袖の泪に月そやとれる

といひつゝけ、物あはれなるけしき、すてかたく哀なり、さらぬたにはかなき世なれば、いつまで見給らんとのみ心ほそくおほゆなるらむ、あとにはおほし出なんやとて、つねよりもなつかしくうちかたらひ給へは、内侍もいとゞもよほされて打敷給ふさまは、今はとそむき行も、猶ひたみちには思ひ立かたき心ちし給ふ、明ぬれば返り給ふ、母上まいり給ひたれば、いかにや、』(42ウ)此ほといたく思ひやせて見え給ふこそ心くるしけれ、おとゞも、いつとなくうきたち給へるとの給へは、物をとて、いたはしけにうちなみたくみておはしませは、何までかかやうにもたまふへきとあはれにて、我も泪すゝみ出るを、とかくまきはして侍るに

か、かくのみ侍れば、つるにはなからへはつましきとのたまふは、

さやうにいまくしく事なたまひそとおほせらるゝ間も、いとあはれなり、御かたにおはしましても、よろつ御めのみとゞまりて、

いつまでとのみおほえ給ふ、中宮の御さん、この月にあたらせ給ひぬれば、時の間もいかゞと、おほつかなくおほしめされて、行ちかふ御つかひもひまなく、御文のかすもつもりて見奉るに、』(43オ)人もかたしけなく見まいらせ候けり、御いのり、山々寺く願をたて、聞えあるこんさうつ、いまこそ心をつくして、おの

くたんそともはなちて手をにぎるしるしにや、つこもりかたに其気色あれば、内は心もとなくおほしめされて、御使行かふそらもなし、おいとのものきんたちは申におよはず、さるへきしやうらうた

ちも、内の御心をつくさせら給へる御事なれば、我さきにと我先にとまいりつとひ給へり、御ものゝけたつやうに見え給ふに、おとゞ御心くるしく立さはき、御いのりかすをつくし給ふ、されともへち

の御事なく、若宮やすくとむまれ給へり、内に、まつわれさうもんせんとのみきしらう、とうの中将まいりて、』(43ウ)かくとさうもん申せば、聞こしめさるゝ御心ちのうれしさと、よのつねにやはたらせ給はむ、たいらかにおはしまさんたに御うれしかるへきに、まして若宮と聞せ給ふに、御心のうちなめならす、おとゞの御心ちも、かひくしくかたしけなきにも、あまうへに見せてた

まつらまほしくおほえ給ふ、藤の中將、御はゞせ持てまいり給へは、きしきともおもたゞしう、大將は、かゝるにつけて、我思ひし事、つるにかなはさりけるしゆくせとも、おもひしられ給ふ、さいしやうの三位、少將のみやうふなどは、在しひめきみの生れ給ひし

時の事、かゝるめてたき事に付ても、先思ひ出られて、かゝる御事もありける物とおもへり、何よりも若宮の御在さま、(44オ) うつくしくめてたく見えさせ給ふにも、誰にてかおろかにおはしまさんと見たてまつる、うちには、いつしか心もたなくおほしめされて、一七日過て、行幸成て見奉り給ふに、うつくしうおはしませは、かなしくおほしめさるゝ、一宮こそ、いまたならばぬ御心ちに、いとめつらしくおほしめすに、今少御心さしもふかき御方にしも、かゝるひかりの出給へは、ことはり過ておほしよろこひつゝ、れいある事にことをとりそへて、おほしおきてたまへは、めてたきなどいはんかたなし、けに末の代までも、かゝるためしは在かたく見え給ふ、いと、御こもちの御おほえ、いはんかたなし、さてもしゆしやくゐんには、ひめ宮の御行を聞しめして、いとくちお敷、(44ウ) かるゝとおほしめしけり、宮などは、心にくて、少々過し給ふこそ中へよけれ、かゝる御在さまは、末の代にあさゝしき御名やもりたまはむ、たゞ云ひかひなき若きもの共に、うちまかせつるゆへそかしとおほしなげく、御めのと、さるへき女ほう二三人まいる給ふ、中将の君、行急なくうしなひ給ひてなけし事、ゐんのおほしみたれたる御事共、うちなけきつゝかたり、ゐんも恋しうおもひ出まひらせて、うちなけき給へり、彼内侍の君やしなひ奉りしひめ君は、月日にそへておとなひ給ふまゝには、たゞ父君の御かほゝをうつしとりたらんやうに見え給ふ、母宮もかよひ給へは、いつかたに付ても、うつくしくのみたくひあらしと見え給ふを、宮はいと(45オ) むかしの御かたみとおほしめせは、ためしなきほとに、ためしなきほとに、かなしくおほしかしつき給ふ、此宮もいとうつくしくおほし給へるを、うちは、いとかなしく見た

てまつり、いたきうつくしみ給ひて、いよゝ此御かたのみ、ひるは日をくらし、よるはもろ共にまりのほり給へは、いと御おほえは、(44) にくかたなく見え給ふ、まことやとうたひの、御心ちにかわつらはせ給ひて、ほとなくうせたまひしかは、ゐんおほしなげく事かきりなし、たゞひとりもち奉り給へは、袖の玉ひかりうしなへる心ちして、おほしなげく御事かきりなし、其かはりにこの宮とおほしめされけと、したひはいかゝとて、すゑ奉り給ふ、此宮は、今一二年も過なは、我はおりゐて、(45ウ) くらゐをゆつり奉らむとおほしめして、一宮春宮にいさせ給へる、さるへきかんたちめ、天上人までも、我(45) とけしきとり給へと、さらに聞いれさせ給はず、おさなき御心にも、彼怒ふ草のひめきみ、宮にてつねに見たてまいらせ給ひしかは、御心にかけて、外さまになし奉らむ事口をしくおほして、其なうてはとふかくおほしめして、おうちの宮にけしき、(45) 我ひとりの御はからひにあらず、内侍のきみにこそ聞えめとて、かくとおほせらるれば、中宮に申て、さあらは、いかにも御はからひと、宮に聞え給へは、春宮よりもあまり御つかひ隙なけれは、いそぎまいらせ給ふ、そのけしきおろかならや、中宮よりも、忍ひたれとめてたくおほしおきて(46オ) 給へり、内侍のきみ、やかておやさまにそひるつゝ、心のかよふはかりいとなみ給へは、いとめつらかなる御在様ともなり、御つほねむねつほなり、いとおさなき御ありさまともに、たかひの御あそひかたきと見えて、よに在かたき御ならひなり、中納言の内侍時めき給ふさま、なのめならすめてたし、かたゝかゝるめてたき御事共は、むかしもおほしいひつたへけれど、かゝるたくひはなきたき、ゆくふともさのよいい

つくさんも中くなり、かゝる御代なれ共、中なこんはかりそいづもつきせず、とし月にそへては、ありし御面かけ忘る時なくおほしほれて、今は一寸ちにおもひ立て、山のあなたへと、おほしたえぬ折なくなけき給へと、いまた其 (46ウ) 期やきたりたまはさりけむ、およくの年月も、いたつらに明し暮らし給ふにも、我なからよしなし、あふにしも身をもいたつらにかうるためしなるに、人しれぬおもひを、かたはしとたにいひしらすへきたよりならねは、つるに谷のむれ木にてくちはてんは、我なからおこかましくなるへきかなと、おもひしらせ給へとも、ともすれば、さてやむへき心ちもしたまはず、宮の大納言のはかなく成しも、かゝるおもひにこそい(47ウ)つらにも成給ひしかとおほしつゞくるに、いとよき世のとのみ、返々思ひしられ給ふ、何につけても留るへきこゝちもしたまはず、おやたちのおほしなけかむ事のみそ、つみふかゝるへき□おほしめしても、(47オ)さてしもこそは、御ためしよからめと、いとよ何にかけてとよめらるゝへき身そと、いとよおほえ給ふ、かゝるありかたきしゆくせのめてたさを、後の世の人に見せたてまつらむとて書留ぬ、

天正(三)□年六月八日

棚守房頭 八十 一歳 (47ウ)